

国際活動の窓から

巻頭言



金属労協(JCM)事務局長
浅沼弘一

JCMの活動のひとつである国際活動の窓から、国内ではなかなか気づかない発見や刺激を受けることがあります。

たとえば我々はよくアジア地域でのワークショップのために、現地を訪問します。訪問先は、タイやインドネシア、シンガポールなどですが、いずれの国も日本に対しては極めて好意的です。ODAによる経済的な支援もその理由でしょうし、最近の日本文化(JKT48とかアニメとか)が受け入れられていることも好意的である理由かもしれません。そのような中では、太平洋戦争の時に、日本から多くの軍隊がこれらの国に進駐していたことなど、考えも及びません。先日シンガポールの博物館に行ってみたのですが、シンガポールが「昭南島」という日本名で呼ばれていたころの歴史を知ることになりました。日本軍が進駐してから撤退するまでの歴史と、その間の人々の生活を展示。日本を敵対するような内容ではありませんでしたが、日本国内にいと意識することのない、太平洋戦争時代の日本のふるまいを、海外の博物館で知ることになりました。改めて、私の(あるいは我々の)昭和史に関する知識の希薄を痛感します。

また、インダストリアルズの執行委員会で滞在したスリランカのコロンボでも昭和史の発見がありました。現地のガイドに、日本人ならぜひ訪れてほしいと、ビルの狭間にある小さな博物

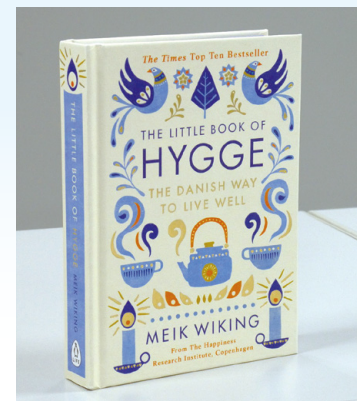
館に連れていかれました。博物館は、スリランカ(当時セイロン)の第二代大統領であるJ.R.ジャヤワルダナ氏の足跡を集めたものでした。彼が大蔵大臣であった時に参加したサンフランシスコ講和会議で、「憎悪は憎悪によって消え去るものではなく、ただ愛によってのみ消え去るものである」という仏陀の言葉をひいて演説を行い、日本を分割統治しようとしていた勢力を抑え、日本を独立回復に導いてくれたそうです。恥ずかしながら、私はその名前さえも、全く聞いたことがありませんでした。海外で初めて知るといっても恥ずかしいことではありますが、これも国際活動の窓から受ける刺激ということではないでしょうか。

少し違った話ですが、我々金属労協と海外の労働組合組織との定期協議もIMF-JC時代から続く、重要な国際活動です。相手組織には、今回特集でインタビューしたドイツのIGメタルや北欧産業労連、中国金属工会、韓国全国金属労働組合連盟など様々な国の製造業を活動地盤とする労働組合と情報交換を行っています。4月の初め、北欧産業労連との交流を行いました。そこでの議論も刺激的でしたが、デンマークの仲間からいただいたお土産も、別の意味で刺激的でした。ずっしりと重くて、少々分厚い本ぐらいの大きさのものを、手渡された時は「さてはデンマークのチョコレートか？」と心躍ったのですが、包みを開けてみると、持ったイメージどおりの少々分厚い本。残念ながらチョコレートではありませんでした。タイトルが“HYGGE”と書いてあり、さっぱり何の本かわかりません。渡してくれたデンマークの仲間にもっこり笑って「ヒュッゲ」としか言ってくれませんでした。英語なのでまだ全部読んでいませんが、最初に“The Danish way to live well”と書いてあり、どうもデンマーク人の幸せな生き方について書

いた本のようなのです。装丁からして、世界で一番幸せな生き方をしているのはデンマーク人であるという自負にあふれています。例えば、毎日キャンドルを灯す人は28%で、一回も灯さない人は4%しかいない。さらに灯すキャンドルの数が6本以上の人は31%である。これをとっても、デンマーク人がいかに簡素だけでも幸せな暮らしを送っているのかわかるだろうといたいなのでしょう。幸いなことに、昨年の秋に日本語版が出ています。何やら我々の活動にも気づきを与えてくれる刺激がこの本にはあるような予感がします。

今回の特集は労働時間。記事の一つであるIGメタルの取り組みに関するインタビューは、賃金の引き上げだけでなく、労働時間の面でも、我々にとって大きな刺激となりました。HYGGEはひょっとしたら、我々にとって、また職場に働く皆さんにとって、「何が幸せなのか」を考え直すきっかけを与えてくれるかもしれません。以前、ブータンに視察に行った人が、「足るを知るだよ」としきりに言っていたことを思い出します。

考えはいろいろと巡ります。ともかく、金属労協の役目として、国際活動の窓から入ってくる発見や刺激を、これからも、なるだけ多くの人に伝えたいと思います。



HYGGE